

第 34 回日本受精着床学会総会・学術講演会

S3-3

長野、2016.9.15-16

臨床における精子の質を落とさない工夫

佐藤学<sup>1</sup>

<sup>1</sup>IVF なんばクリニック

不妊治療の現場において、人工授精や体外受精を行って受精を成立させることは治療を進める上での第一歩であり、配偶子である精子、卵子の取扱いは注意を払う必要がある。

精子は雄性遺伝子を卵子に運ぶ役割を持っていて、DNA の損傷や欠損のない精子、かつ卵子に到達する十分な運動性をもっている精子を選抜することが生体内では自然に起こっていることである。体外で受精作業の前処理として行う精子調整の過程は受精に用いる精子の選抜とその質の維持に重要なポイントであると考えられる。精子操作の中でも精液から正常形態運動精子を分離することが重要で、それをいかに行うか、体外で精子の質を受精まで維持できるかが課題となると考えている。

人工授精や体外受精までの過程の中で精子が影響を受けると思われる要因として、まず自宅または院内で精液が射出されてから調整までの所要時間、その間の保管状況の影響が挙げられる。次に遠心分離(遠心条件、遠心時間、分離材)や Swim-up 法などの分離精製法の設定によって良好精子を選択できるかがポイントになる。また、精子調整後から人工授精や体外受精などに供するまでの環境も精子の質に影響する可能性がある。本シンポジウムでは IVF ラボでの実際と検討データを交えて工夫している点をご紹介します。